

介護は命懸けで親がしてくれた教えだった～認知症介護のリアル～

映画監督 信友 直子 先生／脳科学者 東京大学大学院特任研究員 恩蔵 絢子 先生

拝啓

この度は、「介護は命懸けで親がしてくれた教えだった～認知症介護のリアル～」という素晴らしい動画を拝見する機会をいただき、誠にありがとうございました。

初めまして、国際医療福祉大学大学院 福祉支援工学分野 修士課程2年の崎山夏紀と申します。

私は理学療法士として、日々、高齢の方に関わらせていただいています。

講座の前半、恩蔵 絢子先生のご講演は、認知症への不安や偏見を解きほぐし、患者さんが持つ可能性や価値を見つめ直す貴重な内容でした。特に、「認知症のある人は、日常の中で幸せを強く感じている可能性がある」という結論には、認知症患者さんを支える視点を大きく変える力があると感じました。また、「過去を語ることが今を生きる力になる」というお話は、患者さんとの関わりの中で、どのように感情や思い出を共有するかを考える上で重要な示唆を与えていただきました。

さらに、「他者と会えることの重要性」についてのご指摘は、理学療法士としてのケアにも深く関わるものでした。患者さんが社会的なつながりを持つことで、生きがいを感じられる環境づくりに貢献することが、私たちの役割であると改めて認識しました。

また、認知症患者さんがユーモアや創意工夫を通じて困難を表現しながら生きているというお話には、支援者として彼らの努力に目を向ける大切さを教えられました。患者さん自身の「工夫」を尊重し、リハビリテーションや日常生活の支援においてもその工夫を引き出し、活かすことで、彼らが「その人らしい生活」を取り戻す手助けができると感じます。

恩蔵先生のお話を通じて、認知症の患者さんがどれだけ進行した状態でも、その人らしい生き方を支え、幸せを引き出す支援の重要性を再確認しました。今後も先生の示してくださった視点を現場に取り入れ、認知症患者さんやそのご家族に寄り添ったケアを提供してまいります。

講座の後半、信友 直子先生のご講演は、映画『ぼけますからよろしくお願ひします。』を通じて、認知症介護における現実と愛情の深さを感じる貴重な時間をいただきました。

認知症の進行とともに変化していく家族の姿が、深い愛情とリアルな感情を伴って語られており、「ぼけてなお母は母であり、弱ってなお父は夫である」という言葉には、家族が果たす役割の不変性と、人間の尊厳が宿っていることを感じました。また、ユーモアや工夫をもって困難を乗り越える姿に、どんな状況でも幸せを感じる力があることを教えられました。

映画に込められた「親が子を思う愛」「子が親を思う愛」の美しさは、理学療法士として日々患者さんと向き合う私の心にも深く響きました。認知症患者さんが持つ役割感や達成感を支えることは、人間の尊厳を守るケアを根幹とした、私たちの介護やリハビリの大切な役割であると改めて感じます。

認知症患者さんとその家族が共に生活の質を向上させ、喜びを見いだすためには、身体的なケアだけでなく、心のつながりを支える関わりが必要だと再認識しました。身体が弱っても、心が持つ力は輝き続けるという考えを大切に、患者さんとその家族の「生きる力」を支える理学療法士でありたいと感じました。

信友監督がカメラを通じて伝えた両親への愛情と、その記録を形にされた覚悟に深い感銘を受けました。この気づきを胸に、私自身も患者さんとそのご家族に寄り添い、「その人らしさ」を尊重したケアを提供してまいります。

敬具